

帝京大学 福岡医療技術学部 2024 年度 海外医療研修（デンバー研修）報告書

引率教員:医療技術学科教授 佐藤正広 / 看護学科講師 中村登志子（文責）

<はじめに>

「海外の医療制度を学ぶ」という目的のもと、アメリカのコロラド州デンバーにて 8 日間の海外医療研修（デンバー）を実施した。参加者は、学生 14 名、引率者 2 名、合計 16 名であった。

	PT	NS	RT	EL		CE	合計
	3 年生	2 年生	2 年生	2 年生	1 年生	3 年生	
男性	2	0	0	2	2	1	7
女性	2	2	2	0	0	1	7
合計	4	2	2	4		2	14

※ PT: 理学療法学科、NS: 看護学科、RT: 診療放射線学科、
EL: 医療技術学科救急救命士コース、CE: 医療技術学科臨床工学コース

海外医療研修実施にあたり、物価高と円安の影響など、様々な懸念材料があったため、早い段階で2024年度の実施予定を知らせる事前説明会を行った。具体的には、4/9、4/10の2日間、前年度のデンバー研修を紹介し、事前説明会を行い、本格的な準備に取りかかった。その後、4/22 を締め切りとして参加者を募った。

「国際事情」（自由選択科目）において、事前研修を5回行い、海外研修のご経験を持つ各学科の教員に、現地研修でより良い理解につながる内容での講義をお願いした。また、異なる学科・コースの学生が参加するため、お互いを知るために自己紹介をするなど、学生の不安を解消する工夫も行った。帰国後は、事後研修を4回行い、現地研修でお世話になった方々へ英語でお礼のe-mailを作成し送付した。また現地研修の内容をプレゼンテーションとしてまとめ、全学生及び教職員を対象とした報告会を行い、「国際事情」のまとめとした。

昨年は、研修当初、高山病様症状のある軽微な体調不良者がいたが、今年は体調不良者など出ず学生全員元気に参加できた。これは、昨年は経路便で移動時間が長かったことに対し、今年は成田からデンバー空港へ直行便で移動時間が少なかったことや、到着翌朝午前中はフリータイムを取ったことで、時差ぼけや高山病もなく体調が整えられたと考える。研修の前半は医療施設見学を中心とし、後半にショッピングなど文化体験や、レッド・ロック・パークのハイキングといったアクティビティを楽しみ、夜はホテルの中庭でウェルカムBBQに参加した。

現地医療研修としては、ロッキー山脈地域で小児科最先端医療を担うコロラドこども病院、ドクターヘリで山岳救助も行う救急医療施設である聖アンソニー病院、脊椎損傷専門のクレイグ病院を訪問し、アメリカにおける最先端の医療を見学した。アメリカでの医療における諸問題への取り組みや、医療・リハビリテーションに対する考え方・価値観の違いなど、様々な点において日本と相違点があることを学生自らが発見し、積極的に質問をして自らの理解を深め、視野を広げている様子がすべての施設見学で見られた。

レジス大学では、PT の実習及び解剖学実習に参加し、貴重な体験となった。また、昨年現地で好評であったため、希望者を募り、英語によるプレゼンテーションを行い、その後、現地学生とのランチ交流会を行うなど、実りある経験をすることができた。

一方、参加学生のうち 1 名は、コロラド州立大学（CSU）の加藤宝光准教授のご協力により CSU を訪れ、加藤准教授のラボや、学生が事前にリサーチしてリストアップしていた見学希望部署を巡り、様々な経験をすることができた。各々が体調管理に気を配り、体調不良者が出ることなく、本研修を無事に終えることができた。

<研修概要>

- 1) 期間：2024 年 9 月 2 日（月）～ 9 月 9 日（月） 8日間
- 2) 参加人数：学生 14 名、引率者 2 名、計 16 名
- 3) 宿泊先：Staybridge Suites Denver-Cherry Creek
- 4) 内容の概要：① 病院・医療施設訪問見学 ② 大学訪問見学、授業・実習参加
③ アメリカの医療に関する講義 ④ 文化体験（ハイキング）
- 5) 単位認定：自由科目「国際事情（Overseas Cultural Affairs）」1 単位
- 6) 引率教員：佐藤正広（医療技術学科教授）、中村登志子（看護学科講師）
- 7) 査証取得：渡米前の事前研修にて ESTA を申請

- 8) 保険：学研災付帯海外留学保険
 9) 費用：渡航費用 350,770 円、海外留学保険 4,020 円、現地費用 313,784 円 / 合計 668,574 円
 10) 企画管理部門：帝京大学福岡キャンパス・国際交流委員会
 11) 取扱業者：Colorado House International, LLC、株式会社帝京サービス、株式会社名鉄観光サービス

<現地研修スケジュール>

9月2日(月)		
08:00 福岡空港国内線集合 福岡空港(10:15 発)→羽田空港(12:00 着)→リムジンバス→成田空港(16:30 発)→デンバー国際空港(12:10 着) →移動(小型バン2台)、ホテルチェックイン → ウエルカム BBQ ディナー (17:00～) 適宜解散		
9月3日(火)		
11:00	ホテル出発(小型バン)	
12:00	コロラド子ども病院 ランチ(こども病院カフェテリア) → 病院見学(13:00) 分娩室 透析センター 放射線室 等	
15:00	ホテル着	
16:30	コロラド大学看護学部 朝倉由紀 特任講師による講義(ホテル内会議室)	
17:30	夕食(各自 or ホテル無料軽食バー)	CSU 下見 長距離バス乗車確認(@ユニオン駅)
9月4日(水)		
	レジス大学	CSU
08:00	ホテル出発(小型バン) <午前> • 大学・プログラム紹介 / レクチャー • キャンパスツアー • 帝京大学 学生によるプレゼンテーション • レジス大学 博士課程学生によるプレゼンテーション <昼食> ビザランチ学生交流会 <午後> • 特別解剖実習(背部)	06:45 ホテル出発(乗用車) 07:35 長距離バスに乗車(@ユニオン駅) 09:00 harmony transit center 着 加藤准教授ピックアップ → CSU 着 <午前> • VR ラボ • 動物病院 <昼食> • CSU 学食 <午後> • 加藤准教授研究室にて実験 • 大学院生と交流
17:00	移動(小型バン) → ホテル帰着、解散、自由行動 夕食(各自 or ホテル無料軽食バー)	19:30 移動 → ホテル帰着 夕食
9月5日(木)		
08:00	ホテル出発(小型バン)	
09:00	パラメディック・スタジアム ウェルカムレクチャー	
10:00	移動 Denver West Metro 消防署・救急車見学	
12:00	移動 パラメディック・スタジアム サンドウィッチランチ	
13:00	移動 聖アンソニー病院 院内ツアー フライトフォーライフ(ヘリポート) / 救急部門 放射線室 病棟 等(2グループに分かれて) 移動 パラメディック・スタジアム パラメディック プログラム (2グループに分かれて) パラメディック実習参加: 気道管理のシナリオスキル → 移動(小型バン)	
17:00	ホテル帰着 解散 夕食(各自)	

9月6日(金)	
08:00	ホテル出発(小型バン)
09:00	クレイグ病院 病院紹介レクチャー / 院内ツアー(2グループに分かれて) 脊椎損傷リハビリセンター 車いすガレージ 院内チャペル 等 → 移動(小型バン)
12:00	アウトレット・ショッピングセンター (3時間30分) 各自昼食、及び自由行動(@Castle Rock) → 移動(小型バン)
17:00	ホテル帰着 解散 夕食(各自)
9月7日(土)	
08:00	ホテル出発(小型バン)
09:00	レッド・ロック公園&野外劇場 ハイキング(2kmコース) *園内ピクニックランチ
12:30	ショッピング&レストランランチ
15:00	ホテル到着 フリータイム
17:00	フェアウェル BBQ ディナー (@ホテル中庭)、 研修修了証書授与式 、適宜解散
9月8日(日)	
8:30	ホテルチェックアウト → デンバー国際空港チェックインデンバー国際空港(12:10 発)
9月9日(月)	
	→成田空港(14:55 着) → リムジンバス → 羽田空港(19:35 発) → 福岡空港着(21:30 着)

〈主な研修内容〉

1) コロラド子ども病院見学

1908年に設立、ロッキー山脈地域半径1,600km圏内の子どもへの医療を担っている。コロラド大学アンシュッツ・メディカル・キャンパス内に位置し、地域内の複数の拠点で包括的な小児科医療を提供している。毎年400以上のアウトリーチクリニックを開催し、ロッキー山脈地域の医師や家族に専門知識を提供している。レベル4の新生児集中治療室を有するコロラド胎児ケアセンターは、世界でも



コロラド子ども病院 1階フロア

数少ない真に包括的な胎児ケアプログラムとして知られ、胎児ケア専門チームは、妊婦とその胎児に影響を与えるほぼすべての胎児疾患に対して最先端の治療を提供している。検査室は子どもが緊張しないように、かわいらしい絵が描かれ検査がスムーズにできるような造りとなっていた。検査室に描かれた絵はダイナミックでかわいらしく、学生たちは夢中で写真を撮っていた。

院内には最先端のマルチメディアラジオおよびテレビスタジオであるシークレットスタジオがあった。このスタジオは、子どもたちが子どもらしく歌ったり、踊ったり、時には著名人が訪れ、闘病中の子どもたちが楽しい時間を過ごす機会が得られる場所となっている。



コロラド子ども病院のMRI

子ども専用の透析室を見学した際、ベビーベッドやおもちゃも置かれおり、幼くして過酷な中、透析を頑張る子どもたちの様子が思い浮かぶ。その透析室は、ガラス越しに1階フロアや巨大な吹き抜けを見下ろすことができ、日の光が差し込む明るい構造となっていた。病院全体もショッピングモールのような開放感のある吹き抜け、透明ガラスのエレベーター、カフェテリア、百貨店並みのおもちゃ売り場などが整備されていた。学生たちは、おもちゃ売り場のおもちゃの種類の多さ、かわいさに見とれ、しばらく店から出て来なくなるほどだった。明るく開放的な設備で日本の病院とのスケールの違いに驚く学生たちであった。最先端の医療だけでなく、子どもたちが病気に立ち向かう支援をするための環境が整っており、学生たちはその重要性を改めて感じ取っていた。

2) 講義題名「アメリカにおけるヘルスケア・システムと他職種連携ケア」

朝倉由紀特任講師

(緩和ケア高度実践看護師/ナースサイエンティスト)

日米で幅広く活躍している朝倉由紀氏より、アメリカにおけるヘルスケア・システムと実践についてのレクチャーが行われた。

日米の保険制度の違いや、アメリカの様々な医療的ケア施設、医療における諸問題、言語バリアの問題などについて、学生たちが考えやすい質問形式で話を進め、わかりやすく説明をされた。特に、言葉が通じない場合についての話になると、学生たちは、単に言葉が通じれば良いという問題ではなく、多文化国家であるアメリカでの医療における「平等」とはどういうものかについて真剣に考える良い機会となったようであった。



朝倉特任講師講義風景

3) レジス大学 (Regis University) 訪問

レジス大学では、理学療法を中心とした研修内容となった。まず、理学療法研究科のマーク・レンキング研究科長とアイラ・ゴーマン研究科長補佐が、大学全体の紹介を行い、大学院のプログラム・ディレクターであるヘイディー・アイグスティ教授が取り組みについての説明をされた。

レジス大学での教育は、学生を次世代のグローバルヘルスケアリーダーとして育成することに尽力している。自身の成長から他者を成長させることがリーダーシップの本質であり、リーダーシップをとる上で必要な要素は、「コミュニケーションスキル、自己反省と評価、プロフェッショナリズム、チームワーク、臨床スキル、文化的責任ある実践」だという。その中で、レジス大学の理学療法研究科では、DPT プログラムで最初の統合リーダーシップスレッドを開発した。リーダーシップを学ぶためには、自己認識が必要で、1年生の時点で自己のパーソナリティスタイル理論によって自身に最適なコミュニケーション方法を導き出している。

パーソナリティスタイルは「安定型、誠実型、影響力型、支配型」の4型から成り立ち、レジス大学の生徒の大多数は、安定型、誠実型、の性格タイプに分類されていた。本学の学生も自分が当てはまると思う型に挙手し、自己認識を深めていた。

レジス大学での取り組みとして、医療専門職大学で専門職間のピアグループを形成し、デンバー地域のリソース不足地域の学生の指導に携わり、医療スペイン語ランチグループを運営するなど学生主導での地域の活動を行い、様々な形でのリーダーシップをとる様子が報告された。

学生たちはここでの学びを、帰国後のデンバー研修報告会で発表し、学内の学生に対して4型のパーソナリティスタイルについて発表を行った。これにより学生たちは、自分たちの修得内容を深く理解できているようであった。



レジス大学外観



ヘイディー・アイグスティ教授のレクチャー

① レジス大学でのドライニードリング実習参加

ドライニードリングはいわゆる“鍼”治療であり、日本の理学療法では認められていない。米国内でもすべての州で認められているわけではない。

本学の学生たちは、レジス大学の学生たちのグループに入り、レジス大学の学生から治療手技のデモンストレーションを受けた。デモンストレーションでは、電気刺激を併用したドライニードリングで、下肢の筋肉の回復と神経筋再教育をする様子を見せてくれた。

このような国や地域による制度の違いを学びながら、初めての体験に全員の学生が興味深く見学し、多くの質問を行っていた。



ドライニードリング実習参加

② 帝京大学学生とレジス大学学生によるプレゼンテーション



プレゼンテーション風景

最後に、「ラジオ体操」を全員で行うという企画を行った。ラジオ体操は元々アメリカの保険会社が考案したものであるが、日本の国民の方がなじみがあるようであった。ポケモンの出席スタンプカードなどを紹介したところ、レジス大学の学生に大変興味を示された。また、体操の動きが珍しいようで、新しい体操に進むたびに「OH～」と歓声が上がり、発表学生全員が学生たちの前でお手本を示し、会場が一体となり、盛り上がりを見せた。



ピザランチ交流会

昨年好評であった本学の学生による英語プレゼンテーションを、今年も事前研修において発表希望者を募り、5名がレジス大学の学生・教員に向けてプレゼンテーションを行った。

発表グループは理学療法学科の学生3名と救急救命士コースの学生2名で、「**ASOBI**: Japanese Culture for Kids」というタイトルで日本の文化的な遊びについてのプレゼンを行った。内容は、「福笑い」、「かるた」、「けん玉」、「折り紙」、「ラジオ体操」であった。

プレゼンテーションを行った学生たちは、短い時間で発表するために、内容や順番を時間をかけ何度も修正して本番に臨んだ。その甲斐あって、レジス大学の学生たちは熱心に日本の遊びについて聞いていた。



みんなでラジオ体操

本学の学生は、学内のラジオ体操の練習では、声も小さく自信がない様子であったが、本番では堂々と発表でき、レジス大学の学生と一体となって楽しんでた。観客をいかに巻き込んで楽しませるかを考えて十分に工夫した発表ができた。レジス大学の学生たちも意欲的に聞いてくれ、発表者たちの自信につながるようなとても貴重な経験となった。現地コーディネーターの司会の盛り上げ効果もあり、学生の練習の成果を感じた。プレゼンテーションの後は、レジス大学の学生とのピザランチ交流会を行った。プレゼンテーションの後すっかり打ち解けて、学生同士、教員同士、なごやかに英語でのコミュニケーションを楽しんだ。

③ レジス大学での解剖実習

午後は2グループに分かれて解剖実習に参加した。解剖実習では、レジス大学の学生たちが精力的に取り組むなか、本学学生も実際にメスを手にした。背部の結合組織の剥離や筋の剖出などレジス大学の学生と共同で行った。

解剖実習を見学したことのある学生もいたが、実際にメスを握って人体の構造を確認するのは初めてであったため、学生は大変驚いていた。現地コーディネーターの説明から、実習中軽微な体調不良者が出ることは想定内であった。2、3名は室外の空気を吸える景色の良い所に誘導し、休憩して再び実習に戻る、という対応を取り問題はなかった。みな現地学生とともにとても熱心に体の仕組みについて学んでいた。筋の名称や走行について学んだり、テーブルの上に、脳や脊髄の標本を出してもらったり、実際に手に取って観察するなど大変貴重な学びの時間となった。最後にレジス大学の教授方に見送られ、帰路についた。現地学生と交流し、本学学生の自信につながった実りある一日であった。



解剖実習後のマーク・レンキング研究課長とヘイディー・アイグスティ教授

4) コロラド州立大学

(Colorado State University : CSU) 訪問 (別プログラム)

臨床工学コース3年生1名は、コロラド州立大学 環境・放射線健康科学科 加藤 宝光 准教授のご厚意により、レジス大学のプログラムとは別プログラムを経験し、学生の専門により近い施設のあるCSUを訪問した。渡航前より、学生と加藤准教授は対面で顔合わせをし、学生は事前にリサーチをして、見学したい施設や体験したいことなどのヒアリングおよび共有を行っていた。

デンバーからCSUのあるフォート・コリンズまでは長距離バスを使ったが、学生はコーディネーターとともに前日から下見を行い、連絡を取り合っていたため、問題なく加藤准教授と合流しCSUまで無事に行くことができた。

はじめに、学生はVRラボを訪問し、心臓の聴診や刺さった針の除去などをVRで行い、その後ARシステムも体験した。学生はARの研究をしたいという希望を持っているため、アメリカならではのARの使い方などの発見もあり、多くの学びがあったようである。学食で昼食をとった後は、獣医学部附属教育動物病院を見学した。ここは世界トップクラスの腫瘍科があるところである。X線、CT、MRI、PETCT、リニアックまで揃っており、人間と動物の撮影の仕方の違いなどを学ぶことができたようだ。訪問したときは、ちょうど犬の手術中で、その様子も見学させてもらえたという。

最後に加藤准教授のラボへ行き、DNAの培養とDNA損傷の実験をさせてもらった。なかなか経験することのできない実験を体験し、現地の大学院生との交流を通して、自分の専門分野でないことであっても、いろんなことに興味・関心のアンテナを張っておくことが大事であると実感したようであった。その他にも、様々な研究機材や薬品などを見せてもらい、大いに刺激を受けてきたようである。



CE 学生の実験風景



CE 学生とCSUの教員



CSU 加藤准教授と

5) 「アメリカの EMS (Emergency Medical Services)」レクチャー および West Metro Fire Rescue 消防署 ・ 聖アンソニー病院 (St. Anthony Hospital) の訪問

① アメリカの EMS (Emergency Medical Services) についてのレクチャー

聖アンソニー病院での EMT (Emergency Medical Technician) 研修プログラムは、2020年度のコロナ禍で行った、オンライン海外研修 (VEP) にEL学生が参加し、オンライン・プログラムとして繋がりを持つことができたことがきっかけとなり、昨年度初めてEL学生のデンバー研修参加を受けて実現したコンテンツである。

アンドリュー・ウィトル氏から、アメリカの EMS の歴史や EMT とパラメディックの相違点、EMT・プログラムとパラメディック・プログラムについて、EMS のこれからの課題についてレクチャーがあった。EMS トレーニングは病院ベースのプログラムであるが、ここ 20 年ほどでコミュニティ・カレッジや大学のプログラムに移行しつつあるということだ。またコロラド州周辺で唯一の Trauma Room 10 (T-10) という高速エレベーターで接続されている緊急手術室についても紹介してくれた。



アンドリュー・ウィトル氏の説明

既に消防士としての経験を持った上で、さらにキャリアを積むパラメディックを目指す現地学生は、女性も多く、パラメディックになろうと思ったきっかけなどを語ってもらい、学生たちは興味津々であった。将来アメリカに渡りパラメディックを目指したいと考える学生もあり、学生たちは、積極的に質問をし、交流を深めることができた。

② West Metro Fire Rescue 消防署見学

レクチャーの後、バスで移動し、消防署を見学した。消防署見学は、本キャンパス救命救急士コースからの強い希望があり、交渉が続けた結果、始まったプログラムである。昨年に引き続き、レイクウッド市にある“West Metro Fire Rescue”を訪問した。到着後、早速消防署内の見学ツアーを実施した。トレーニングジム、キッチンダイニング、シアタールームなどを見学したが、日本とはコンセプトもスケールも異なるため、学生たちは終始驚いていた。救急車と消防車の見学を行い、学生たちは積極的にキャプテンに質問を行っていた。

救急車見学では実際に中に入ってその設備の説明を受けた。多くの種類の薬剤と、常に整理整頓するための色分けシステムなどを

聞き、学生たちはさらにたくさんの質問をしていた。ハイレベルな業務もさることながら、「隊員は第 2 の家族だ」と強調され、チームの信頼関係が重要であることが理解できた。救急車も日本よりも大きく、最大3~4人を処置搬送可能とのことであった。学生の一人は運転席に座った際「足が届かない」と驚き、体格差から成る救急車の構造の違いを実感していた。

消防車は、日本の一般的な車両に比べて約1.5 倍もの大きさがあり、ロッキー山脈の山岳救助にも対応できる装備を搭載している。見学最中に突然、署内にサイレンが鳴り響き、出動要請があった。今まで学生に説明してくださっていた救急隊員たちが、1 分以内に速やかに出動していった。その姿に、学生達は大変感銘を受けていた。消防士が迅速・確実に完了し、学生は修練の重要性を実感していた。



West Metro Fire Rescue 消防署をバックに

③聖アンソニー病院 院内ツアー

消防署見学、パラメディックスタジアムでサンドイッチランチを楽しんだ後、パラメディック・プログラムがある建物から徒歩約10分のところにある聖アンソニー病院へバスで移動し、院内2グループに分かれて見学を行った。ジェネット・バーグストロム看護部長の案内で、4ユニット24床・全個室のICU、救急車から直接個室に搬送され処置をすることができるERを見学した。それぞれ病棟の薬剤師やパラメディックと話をする時間を設けてくれた。

看護部長は非常に明るく、気さくな方で、話をするだけで元気をもらった。またアメリカでも投薬ミスが相次ぎ、最近はすべてコンピュータ管理になった現状等を説明してもらい、200万もの薬剤を一元管理できる自動調剤システムであるピクサスを見せてもらった。

心臓カテーテル室では手術直前の準備の様子を見学した。そしてヘリや救急車で搬送された重症患者を高速エレベーターで運び緊急手術を施行するシステムであるT-10など、学生たちは聖アンソニー病院独自の救命センターの構造・設備・管理に触れることができた。

フライト・フォー・ライフ（ドクターヘリ）では、パイロット1名とフライトナース2名が案内してくれた。医療用ヘリコプターにはドクターが乗ることはなく、中で処置を行うのはフライトナースかパラメディックであるという説明に、学生は驚くと同時に、フライトナースとパラメディックのレベルの高さを痛感していた。

この頃になると、学生たちは随分とアメリカの学びの雰囲気になっさり慣れ、手の空いている現地スタッフを見つけては次々と質問をしている姿が印象的であった。



聖アンソニー病院の看護部長と学生達



フライト・フォー・ライフ（ドクターヘリ）



ヘリをバックに記念写真

国内初の個人病院ベースの医療用ヘリコプターで、アメリカで最も実績のある救命救急搬送プログラムである「フライト・フォー・ライフ」（日本ではドクターヘリ）についての説明があった。1972年に始まり、今では9つの州を繋ぐプログラムとなっているということであった。ここでも学生たちは盛んに質問を投げかけ、積極的な姿勢を見せていた。

④ パラメディックの実習参加

パラメディックの実習では、気管挿管と気管切開の練習をした。アンドリュー・ウィトル主任教官や現地学生から手技手順を学び、その後、本学学生が一人一人実施した。緊張のため、手技がごちない学生もいたが、臨床工学コースの学生は実技テストを終えたばかりで、堂々と上手に実践しており、とても頼もしかった。現地の学生や教官からほめられ、笑顔で会話が弾んでいた。また、本学、救急救命コースの学生は、救命処置の実演練習を現地学生と行った。リーダーと共にチームが協力してテキパキと行動し、互いを理解し友情を深めていた。



パラメディックプログラムの学生たちと



パラメディックプログラム参加

6) クレイグ病院 (Craig Hospital) 訪問

クレイグ病院は、US News & World Report による、全米トップ 10 リハビリテーション病院に 1990 年にランキングして以来34年連続ランクインする、脊髄損傷と外傷性脳損傷を専門とする亜急性期リハビリテーション病院である。

はじめに、PT 部門の教育コーディネーター兼臨床指導者であるコートニー・ウルフ氏から、病院の歴史、施設概要、職員の職種と人数、病院内リハビリテーションの特徴などについてのレクチャーがあった。

その後、他職種連携を意識した2つのグループに分かれて病院見学を行った。エンジニア部門となる車椅子クリニックでは、車椅子の多くの素材・種類の部品が並べられ、まるで巨大な車椅子工場のようなであった。患者のニーズに合わせて車椅子がカスタマイズされていることを知り、その規模の大きさに学生たちは驚きの表情を浮かべていた。

PEAK センター (PEAK は Performance, Exercise, Attitude, Knowledge の頭文字) では、大きなリハビリテーション・マシンやプールもあるエクササイズ・センター、様々な障害物がある中を車椅子の練習ができる屋外のトレーニング・パーク、本物の車や飛行機の座席が設置され、車椅子に乗った状態で飛行機や車に乗ることを想定した練習ができるトレーニング・ルーム、レクリエーション・エリアなどを見学して回



West Metro Fire Rescue 消防署をバックに



車椅子専門部門

り、施設・設備の充実ぶりに学生たちは圧倒された様子であった。

この施設は、「リハビリテーションを楽しく」をモットーとしていて、学生たちは施設利用者の積極的な姿勢と笑顔からそれを感じとっていた。訪れた日は病院の中庭にキッチンカーが立ち並び、まるでガーデンパーティーのような賑わいであった。患者も家族も医療療者も一緒にランチを楽しみ週1回の催しだという。日本の病院ではあまり見られない「リハビリを楽しく」という様子が伺える一場面であった。患者、家族、そしてスタッフがひとつのファミリーとして、この環境の中で社会復帰へ向かう流れを、学生たちは感じ取れたのではないかと思う。

最後に、患者から学ぶこと、互いのコミュニケーションを大事にすること、継続して学び続けることなどのアドバイスを心得、充実した施設訪問となった。

7) Red Rocks ハイキング

レッドロック公園ではハイキングトレイルもあり、観光客だけでなく現地の方もたくさん訪れていた。標高の高いデンバーでの 1 時間のハイキングはなかなかハードなものであったが、快晴の青空の下で、大自然に抱かれた環境はまさにアメリカを感じられるものであった。ハイキングの途中や休憩の時など、学生たちは、現地の方々と英語であいさつを交わしたり、英語でコミュニケーションを取っていた。この頃になると学生たちは、物怖じせず英語での会話を楽しんでいた。



レッド・ロック・パーク・ハイキング



野外劇場

ハイキングのゴールは、野外音楽劇場「Red Rocks Amphitheatre」ステイングやビートルズからオペラスターや U2 まで、有名なアーティストがライブを行って来たゆかりの地で、劇場の前にあるビジターセンターでは、アーティストのサイン、劇場の歴史などが詳細につづられていた。

8) アウトレットショッピング文化体験

文化体験としてアウトレットショッピングモールにてショッピングを楽しんだ。各自でランチを取り、ショッピングを楽しんだが、男子学生たちは、前々から計画していたアメリカンステーキをほおぼってアメリカを満喫していた。学生たちは店員と英語の会話を交えながら、それぞれお目当てのものを購入し、満足していた。



Outlets at Castle Rock



Outlets at Castle Rock



Castle Rock 内ハンバーガーショップ

9) フェアウェル BBQ ディナーと研修修了式

ショッピングの後、ホテルの中庭でフェアウェル BBQ 及び研修修了証書授与式を行った。

ある程度食事をしたところで、一人一人に研修修了証の授与を行い、学科毎に代表者が前に出て、研修の良い思い出・残念な思い出についてスピーチをもらった。

修了証授与は、コーディネーターのサム・グットマン氏より一人一人の学生に温かいコメントをいただきながら手渡された。中には感激で涙ぐむ学生もいた。

最後に、学生リーダーを務めた救急救命士コース 2 年の学生が締めめの挨拶で修了式を終えた。最終日ということもあり、最初の頃とは違って、学科・学年を超えて皆が仲良くなっており、研修の仲間として交流し互いを認め合う姿が非常に微笑ましかった。



修了証書授与式

<まとめ>

2024年度は2023年度の経験を活かし、昨年訪問した施設や新たにコロラド子ども病院を加え、充実した研修となった。現地コーディネーターであるグッドマン・サム&知子夫妻の長年の知恵と経験の上に培われたコーディネート力と協力のおかげで、あらゆる面でこれまでにない素晴らしい海外医療研修にすることができたと思う。

8日間という短い期間ではあったが、今年は直行便であったこと、初日、翌日は余裕のあるスケジュールだったため、体力的に昨年より負担が少ない研修であったと思う。参加した学生の満足度は非常に高く、また、「文化体験も良かったが、医療研修のほう充実していて学ぶことが多く、学ぶことがとても楽しかった」という声がほとんどであり、「海外の医療制度を学ぶ」という目的が十分に達成された海外医療研修であったと思う。

これこそ単なる海外研修ではない、帝京大学福岡キャンパス独自の海外医療研修の醍醐味であり、魅力の一つであることは間違いないと確信した研修であった。

